

デンマークの女性が輝いているわけ 幸福先進国への社会づくり

デンマークの男性と国際結婚をし「幸福先進国」に暮らして半世紀。二人の日本女性が書いた『デンマークの女性が輝いているわけ』は、読めば読むほど学ぶことが多い本だった。

ジェンダーギャップ指数121位の日本と、14位のデンマーク。デモクラシーの根づいた国と、そうでない国。投票率が85%もある北欧の国と、50%そこそこの日本…と、比較をすればキリがないほど福祉政策や社会制度の違いに羨ましさでいっぱいになる。が、私がこの本に感銘を受けたのは、政策や社会システムの違いよりも、「人間のありよう」に焦点を当てて書かれていたからだった。

隣の芝生の青さばかりを羨ましがっている姉に、遠く離れて暮らす妹が心配して送ってくれたエールのように思え、胸にしみたのである。

「困っている人がいたり、なにか問題が起きたら、『それはおかしい!』と声を上げ何でも国任せ、人任せにしないこと」「あなたたちが今後成果を出していくには、女性という大きな共通項でまとまり、組織して、全国的なうねりを作っていくこと。それしかないとと思うわ」

そんな当たり前なことが、日本に暮らす私たちは、いつから苦手になってしまったのだろう。

著者の夏代さんと孝子さんがこの本で伝えたかったことはひとつである。

不満ばかり言っていても社会は変わらない。周囲と連携して、まず自分自身が動くことしかない。「自分の人生を自分で選ぶ」デンマークの人びとのように。

まつ ひさこ
映画監督・作家 松井 久子さん



- 澤渡夏代 プラント 小島ブンゴード孝子 著
- 大月書店
- 2020年初版
- 1,800円(税別)

自分の人生を自分で選ぶ

デンマークの人びとは、幼い頃から「個」を基本に育てられ、皆が「自分はこれで良いのだ。この社会にいる価値がある」と思っているという。褒めて育てる教育を受けていると、自然に自己肯定感が身について、大人になっても「決定に参加する機会を持ち、責任感を抱き、社会に影響力を持つことができる自分」を生きることができる。

それが民主主義の理念に支えられて、真に自立した人びとの社会だと思う。

保育園に通えない子どもたち —「無園児」という闇

驚くことに、本邦の0~2歳児の就園率は他の先進国に比較して極めて低い。その要因のひとつは、認可施設を利用するため「保育の必要性の事由」を明確にした上で、自治体への申請と利用認定の段階が必要である点とされている。その事由の中でも、特に就労要件は大きな障壁となっている。就労要件を必要とする「一時預かり事業」の普及も低く、子育て支援への予算不足は否めない。

地方行政自治体は、既に既存の調査を通じて無園児を抱える家庭を把握している。一方で、「保育園に通えない子どもたち」を抱える無園児家庭を「無償化」となった幼児教育施設への通園に繋ぐ取り組みを始めている地方行政自治体は現在ほとんどない。貧困、DV、子ども自身の発達障害など複雑に絡み合った無園児家庭こそ社会の助けを求めている。「助けを求める」すなわち「支援を受け入れる」余裕さえなくした家族は、「児童虐待」という坂道を、速度を上げて転げ出す。

本書では「無園児の不平等」という障壁を取り除くために、具体策をいくつか取り上げている。「なぜ無償化では不十分なのか」「義務化へのハードルとはなにか」を著者自身の研究結果をもとに分かりやすく解説している。無園児への支援には、それぞれの家庭における多様性を許容した形での「幼児教育の義務化」を早急に取り組むべきだと訴える。

子ども達の育ちや遊びの環境を第一に、その質の向上を常に目指す社会には、「弱者を守る」穏やかな社会とその将来が待っている…そう信じたい。

北九州市立八幡病院
統括部長・小児総合医療センター長 神薦 淳司さん

児童虐待

「児童虐待」とは、児童虐待の防止等に関する法律 第二条で「保護者がその監護する児童(18歳に満たない者)について行う行為」と定義されている。身体的虐待、ネグレクト、性的虐待、心理的虐待の4つの主要なタイプとし、育児放棄、親の薬物使用、人身取引も虐待またはネグレクトと定義している。これらのタイプの虐待は個別に見られることがあるが、多くが複合的に発生している。



- 可知 悠子 著
- 筑摩書房
- 2020年初版
- 800円(税別)

男性育休の困難 取得を阻む「職場の雰囲気」

育児・介護休業法は労働者からの育休取得申請を企業は拒否できないと定めている。だが、実際は職場の雰囲気が取得申請自体をためらわせている面がある。

本書の副題は「取得を阻む『職場の雰囲気』」であるが、当事者の規範意識を読み解く事例分析により、この雰囲気というつかみどころのない問題の正体を明らかにしようとしている。その鍵となる概念は「時間意識」である。職場で共有されている「仕事優先」の時間意識は、仕事と育児の優先順位を柔軟に変える時間意識を容認せず、仕事か育児かの二者択一を男女に迫る。このとき男性に仕事を選ばせる重要な要素として、家計を支える稼ぎ手としての役割意識が挙げられる。つまり、労働時間の削減より賃金を優先する意識が男性育休を阻む雰囲気の中核にあることを著者は看破する。その観点から、男性が育休を取得しやすい雰囲気をつくるヒントとして、長時間労働の対価を残業手当という金銭ではなく、ドイツの労働時間貯蓄制度のように休みで相殺することの重要性も説いている。

低迷する男性育休取得率を上昇気流に乗せるため、企業からの働きかけで男性労働者に育休を取らせる「男性育休義務化論」や、育休中の所得保障拡充を主張する政治家や運動家の声をしばしば耳にする。そうした施策に育休を取りやすくなる効果が期待できるか、本書を読めば答えは明らかであろう。近年盛り上がっている実践的な男性育休推進論とは一線を画す冷静な研究書であるが、実務家にも一読を勧めたい。

独立行政法人 労働政策研究・研修機構 主任研究員 池田 心豪さん



- 齋藤 早苗 著
- 青弓社
- 2020年初版
- 2,000円(税別)

男性育休

1991年制定の育児休業法(現育児・介護休業法)から男性も育児休業(育休)の対象となり、次世代育成支援対策推進法(次世代法)にもとづく優良企業(くるみん)認定基準に男性育休取得実績を含める等、政府はその取得促進に努めている。男性の育休取得率は近年上昇傾向にあるが、7.48%(2019年)にとどまっており、女性の83.0%(同年)と大きな差がある。その要因として制度の周知不足とともに職場の雰囲気が問題になっている。

保育園に通えない子どもたち —「無園児」という闇

驚くことに、本邦の0~2歳児の就園率は他の先進国に比較して極めて低い。その要因のひとつは、認可施設を利用するため「保育の必要性の事由」を明確にした上で、自治体への申請と利用認定の段階が必要である点とされている。その事由の中でも、特に就労要件は大きな障壁となっている。就労要件を必要とする「一時預かり事業」の普及も低く、子育て支援への予算不足は否めない。

地方行政自治体は、既に既存の調査を通じて無園児を抱える家庭を把握している。一方で、「保育園に通えない子どもたち」を抱える無園児家庭を「無償化」となった幼児教育施設への通園に繋ぐ取り組みを始めている地方行政自治体は現在ほとんどない。貧困、DV、子ども自身の発達障害など複雑に絡み合った無園児家庭こそ社会の助けを求めている。「助けを求める」すなわち「支援を受け入れる」余裕さえなくした家族は、「児童虐待」という坂道を、速度を上げて転げ出す。

本書では「無園児の不平等」という障壁を取り除くために、具体策をいくつか取り上げている。「なぜ無償化では不十分なのか」「義務化へのハードルとはなにか」を著者自身の研究結果をもとに分かりやすく解説している。無園児への支援には、それぞれの家庭における多様性を許容した形での「幼児教育の義務化」を早急に取り組むべきだと訴える。

子ども達の育ちや遊びの環境を第一に、その質の向上を常に目指す社会には、「弱者を守る」穏やかな社会とその将来が待っている…そう信じたい。

北九州市立八幡病院
統括部長・小児総合医療センター長 神薦 淳司さん

& MORE 手に取りやすい一冊

親子で話そう!性教育

(株)Kids Public「産婦人科オンライン」代表 重見 大介さん



- 浅井 春夫
良 香織 監修
- 朝日新聞出版
- 2020年初版
- 1,200円(税別)

本書は、「性教育に関する対話」について、主に保護者向けに書かれた書籍である。読みやすいレイアウトで、かつその内容が「セックスなど性的話題の説明方法」だけに関する狭い視野ではない点が素晴らしい。つまり、「包括的性教育」を主たるテーマとし、副題としても「子どもを性被害から守るために大切なこと」と設定しているのだ。

近年、日本に不足している概念として「包括的性教育」が呼ばれている。これは、「性に関する知識やスキルだけでなく、人権やジェンダー観、多様性、幸福を学ぶ」ための重要な概念だが、日本ではまだ十分に認知されているとは言い難い状況である。

本書は6つの章で構成されている。1・2章では、家庭で気軽に性教育を始める上でのコツを紹介しつつ、なぜこれが重要なのかを分かりやすく説明しているため、読んでいてスッと頭に入りやすい。続く3・4章では、子どもを危険(対人・メディアの両面)から守るために、どのようなポイントを押さえて日頃から対話をしておくことが大切か、具体例とともに解説している。最後の5・6章では実践編として、実生活でも子どもに聞かれる機会が多いトピック・質問例を挙げながら、説明の仕方についてアドバイスしている。「赤ちゃんはどうやってできるの?」、「子どもがアダルトサイトを見ている」など、まさにどうしたらよいかわからず困っていた!というご家庭も多いのではないだろうか。

最後に、産婦人科医である私の目から見ても、本書で使われている用語や内容はどれも正確で、安心して読むことができた。本書を通して、適切な性の知識や多様性、人権などについて親子で対話する機会をぜひ持ていただきたい。これから社会を担う子どもたちにとって、非常に大切な時間となることは間違いない。